

平成二十八年度学位記授与式式辞

平成二十九年三月十八日（土）
アイザック小杉文化ホール ラポール

本日、寺林副知事をはじめ多くのご来賓の皆様をお迎えし、平成二十八年度富山県立大学工学部・大学院工学研究科の学位記授与式を挙行できますことは、誠に喜びに堪えません。これも、ご来賓の皆様をはじめこれまで本学の教育・研究を支えてくださった多くの関係の皆様のご支援、ご尽力の賜であり、教職員を代表し、心から御礼を申し上げます。

そして、今日の佳き日を迎えられた工学部・大学院、計二百九十一名の卒業生・修了生の皆さん、本当におめでとうございます。また、ご家族の皆様には、お喜びも一入のことと存じます。

さて、皆さんは本学在学中に、多くの研鑽を積み、講義や実習、あるいは学位論文研究に取り組み、また、友人や教職員との交わりを通して、専門知識のみならず、物事を見通す目、考える力、専門分野において問題を捉え解決する手法、また、コミュニケーション力や、自己学習力など、エンジニアやリサーチャーとして、必要な能力に加え、人生・社会を生きていく上で大切な様々な「力」を習得されてきたと思います。

皆さんのなかには、これから社会に出て活躍される方、また大学院に進んで、さらに勉学を深めようとする方がおられます。皆さんは、これから、難しい仕事や難解な研究テーマなど、自分の力だけではとても解決できそうにない、いわゆる「壁」と言われるものに遭遇すると思います。その「壁」は、仕事に限らず、人間関係の壁、技術の壁、研究の壁など、様々な場面で待ち受けています。この壁を「勇気と好奇心」を持って乗り越えてほしいのです。本学において、「チャレンジする勇気」と「失敗を恐れない勇気」、そして「貪欲な好奇心」を学んだことと思いますので、この「勇気」と「好奇心」で難題を克服してほしいのです。

本日は、ここで、「勇気と好奇心」で克服していただきたい壁または難題の二つの例について述べたいと思います。

一つは一般的なもので、数学でいえば、未知数よりも方程式の数が少ない連立方程式の場合です。そのままでは、連立方程式は解けませんので、足りない方程式を仮定するか工夫して作成することになります。そのためには、人知れない努力や才能のほか、一瞬のひらめきも必要かと思います。インド人の天文学者が冥王星の存在を予測したのも、湯川博士が中間子の存在を予測したのもこの例

だったのではないかと思います。いずれも華麗でいかにも科学という感じがします。

つぎに二つ目の例です。県内企業でも、オンリーワンの技術を持っている会社が多く存在します。すばらしいことです。ところが、私の個人的な見解にすぎない面もありますが、それらの技術の中身をよく観察しますと、その技術の中に、一部分職人芸といわれるものがあります。これはその人にしかできない技芸なので、他人に真似されることはないのですが、今度は、その人が退いた時、後継者がいないという大問題が生じます。

つまり、どんな良い技芸でも伝承ができないというのは問題です。これが二つ目の難題です。実際、後継者問題で困っている企業がいくつもあります。

職人芸というものは、歌舞伎の芸と同様に、小さいころから厳しい稽古で習い覚えて習得するものなので、一朝一夕には習得できません。専門的な修練を十分積んではじめてできる、たくみな技芸です。そこで、そのような職人芸の技芸を工学的な技術にまでブレイクスルーして、技芸を他人でも見える形の技術にまで掘り下げられる技術者が強く求められています。

このためには、どんな難問にも逃げないで、挑戦し、粘り強く、コツコツと努力することが必要でしょう。また、人工知能、IoTやビッグデータ処理など最新の知識習得も必要になるでしょう。

皆さんには、ぜひ「勇気と好奇心」をもってこの難題に挑戦していただきたいのです。わたしは、この難題に挑戦する技術者こそ、本学の卒業生の真骨頂であると思います。

本学卒業生の特徴は何ですかと問われれば、私はこう答えたいのです。「派手さはなくて、一見目立たないかもしれないけれど、どんな難問にも、コツコツと粘り強く立ち向かい、最期には解決してみせる優秀な人材です。」と。実際そう思っています。この技芸を可視化、今の言葉でいえば「見える化」が一部でも達成できれば、博士論文になると思います。

その難問に立ち向かうとき、自分だけで悩まないで、ぜひ本学を利用してください。本学には昔も今も優秀な教員がそろっています。皆さんが社会で数年経験すれば気づかれると思います。

日本は戦後大きな経済発展を遂げてGDP世界第二位の地位を占め、科学技術、産業両面で世界に対して存在感を示してきました。しかし今日では、社会は少子高齢化と人口減少が進み、経済も成熟段階に入って、規模では新興国を下回り、それだけでは存在感は得られなくなっています。この時期に、日本の発展段階を再認識し、先進国、開発途上国に対して今日の立ち位置を確立し、尊重される国であり続けることは極めて重要なことであると思います。そのために皆さんへの期待は大きいのです。

皆さんは、「チャレンジする勇気」と「失敗を恐れない勇気」、そして「貪欲な好奇心」という知識では得られない大切なものを身につけています。私は、このことが皆さんの発展の原動力になるものと信じています。活躍を期待します。

富山県立大学は、一昨年四月の公立大学法人化に伴い、県内産業を支える人材の育成と若者の定着を図るため、産業界のご意見等もお聞きしながら、一層魅力ある大学となるよう、学科の拡充・新設に取り組んでいます。

昨年四月には、機械システム工学科と知能デザイン工学科の二学科で、定員を十名ずつ増やしました。

本年四月には、情報システム工学科と環境工学科の二学科について、名称をそれぞれ電子・情報工学科と環境・社会基盤工学科に変更するとともに定員増を行うこととしています。また、工学部では全国初となる医薬品工学科（定員三十五名）を新設し、これらにより入学定員を平成二十七年度に比べて百名増やし、三百三十名といたします。

こうした定員増に対応するため、新校舎を建設することとし、現在、実施設計を進めています。

さらに平成三十一年度には看護学部を創設することとしており、富山県立大学は地域の知の拠点として、ますます発展していきます。皆さんも温かい目でこの発展を見ていただきたいと思いますし、ぜひ富山県立大学の卒業生は「どこか違うなあ」と言われる存在になってください。

皆さんが、目の前の壁から逃げることなく、何事にもチャレンジする勇気、失敗を恐れない勇気、そして貪欲な好奇心を持って、これからの仕事、勉学に取り組まれ、社会に貢献する立派なエンジニアやリサーチャーとして、大きく、大きく成長されますよう心から祈念し、私の式辞といたします。

平成二十九年三月十八日

富山県立大学 学長 石塚 勝